

敗戦

福岡県 鶴田政恵

昭和二十年の春四月末、私共は、長年住みなれた石炭の都、撫順に別れをつけ、単身赴任している主人のいる阜新市へ移転しました。この駅は、広い平野の真中に、点のように、小さくポツンと、建っていました。

駅から三十分ほど馬車にゆられながら、目的地の振興街の興銀社に着きました。見ると、六百坪の広い土地に、れんがで囲まれた、二棟の社宅があり、二軒つづきの平屋です。私宅の隣りは生駒さんで、ご家族は、ご夫婦と、六歳を頭に男の子が三人、合計五人です。向いは、朝鮮人の林さん一家がおられました。

覚悟はしてはいましたが、五月のある日、主人に赤紙がきました。現地召集です。なれない土地で、心細く、不安でしたが、これもお国のためと、耐えました。

六月になると、社宅のまわりの広い野原に赤や黄色の可憐な草花が咲き、見渡す限り花の海。私は思わず、歌を口ずさみました。

菜の花ばたけに 入り日うすれ……………

私共の六歳の子と四歳の子二人は、お隣りの生駒さんの坊や達と、手に手に花籠を持って、花を摘んでいます。

花を摘んでは おつむにさせば……………

地上の極楽とは裏腹に、空には時折、B 29が、ごう音をうならせ、地を響かせ、編隊を組んで飛んで行きます。大かた、奉天爆撃でしょう。日の丸をつけた日本の飛行機はぜんぜん見えません。どうなっているのでしょうか。早くきて、アメリカのB 29を追っばらつてくれればよいものを、と思いつながら、空を見上げます。目を前方に向けると、野原では、親豚が子豚をお供に、ぞろぞろとのんびり餌さがし。のん気な風景です。

しかし、しだいに状況は変わってきました。お隣りの生駒さんにも召集令状がきて、泉さんも応召、誰々さんも、出征と、次々と兵隊にとられてしまつて、残

った男子は、年老いた支店長さんと、小使いのおじさんと幼い子供だけになりました。あとは、女だけです。

八月九日、私は、子供を連れて、撫順にいる両親のもとに、里帰りをしました。ラジオから流れてくる音が、耳につたわってきました。「晴天のへきれき」とは、この事でしょう。「ソ連が対日宣戦布告」その言葉だけが、今でも心に強く残っております。私は、「おかしいなあ、ソ連と日本は不可侵条約を結んでいるのに」と、考えても、ラジオが放送したので事実だ。「ソ連がドイツに攻められた時、日本は信義を守って、攻めなかった。あの時、日本が、ドイツと手を合わせて、挟み撃ちにすれば、こんなことにはならなかったのに、とじたんだを踏んだけれど、後の祭。口惜しかったけれど、背に腹はかえられない。先ず、我が子を守らねばならない」と翌日、夜明けを待って、一番列車に乗りこみ、阜新へ帰りました。

荷造りをして、両親のもとへ再び行くべく、駅に急ぎました。ところが列車が不通になり、すこすこと家にもどりました。

八月十五日、終戦の詔勅の放送を聞く。肩から力がぬけていく。いったいせんたい、どうなるのだろうか。

何をする気力もない。日本国中暗雲におおわれ、無気力の時間が経過した。私達はこれからどうしようかと、話し合いましたが、なかなか結論がでませんでした。

八月三十日、家の中をホウキではいていた時、突然、廊下から、ガタンガタンと荒々しい軍靴の音がしたかと思ったら、ソ連軍の若い将校が入って来ました。私は、ギクッとしました。家の戸の前に、私の二人の子供と、お隣の親子五人が、こわごわと遠まきに見ています。ソ連兵は片手に、大きなピストルを持ち、片手で私の腕をつかまえています。振り払おうとしても、相手は大きくて、力もあり、ほどくことが出来ません。もう、最後かと、観念しました。その時、市役所につとめておられた方と、おじいさんが、ロシア語の本を持って、ロシア語で、そのソ連兵に話をしました。次の瞬間、彼は、私の腕時計を取りはずしたと思ったら、私の手を放し、窓から飛び降り、塀をのり越え、逃げに行きました。こわかったことと、有り難かったこと。

終生忘れることが出来ません。

人生の半分の終結

福岡県 佐々木 定 子

終戦、昭和二十年八月十五日、生涯忘れることので

きない、いまわしい日であり、また嬉しい嬉しい日でもありました。思いはつきません。ちょうど終戦の詔勅から五、六日たった頃でした。家の前の通りは、人っ子一人通らぬほどのたたずまいの中を突然、ソ連兵が十五、六人わいわいと私達の家のほうへなだれこんできました。私は子供達を三畳の部屋に押しやり、外から鍵をかけて炊事場に立ちました。外はただならぬようすです。いたずらにピストルを乱射する音、大声でわめくのが、おそろしく、炊事場に座りこんでしまつておりました。

満州の夜は早くいつしかあたりは暗くなり、子供達のことをすっかり忘れていた自分に気がつきました。

あわてて子供達の部屋に行きますと、二人の子供は恐ろしさ、ひもじさにつかれ、重なるようにして布団の上で眠ってしまつておりました。応召したまま帰らぬ主人、便り一つなく、どこでどうしているかもわからぬ主人を思い、昔の人が言つたように、一寸先はやみとは、本当にそうだなどと思ひながら、子供達におにぎりを作りました。

明けて二十一日だったと覚えています。隣家のご主人が裏口からこっそりと顔をのぞかせて、「昨日のソ連兵はいちばん素性の悪い兵隊で、勝手気ままに日本人の家に入りこみ、貴金属を奪い、婦女子を手込めにして帰る途中、運悪くソ連のゲーペーウにつかまり、その場で後手に縛られたまま銃殺され、今そこで後片づけがあつたそうですよ、見に行きませんか」と、苦笑いをして帰つて行かれました。そのことがあつた後は、ソ連兵は悪いと思ひこんでいた私達は、ゲーペーウの掟にはやはりきびしい正義もあるのだろうかと思ひをあらたにしました。が、しかしソ連はソ連でしかないようなことも起こりました。ある日の夕方、白系